

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 9 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520201

研究課題名（和文） 島津家家伝の生成過程と軍記物語・兵法書の関係についての遡及的研究

研究課題名（英文） Retracing the Formation Process of Shimazu Household Biographical Records (*kaden*) and their Relationship to Military Tales and Treatises

研究代表者

鈴木 彰 (SUZUKI AKIRA)

明治大学・政治経済学部・准教授

研究者番号：40287941

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、島津家に関わる諸資料を調査し、島津家の由緒にかんする理解の形成と展開の過程を、室町・戦国期から近世末までの期間を見渡しつつ、解き明かすことである。16世紀末から17世紀にかけて島津家由緒は大きく組みかえられていること、そうした由緒の再編の過程では軍記物語をはじめとする中世文芸が作用していること、また19世紀の薩摩藩主島津斉興とその周辺では、それ以前の状況を踏まえ、中世文芸をも改めて受容しつつ、新たな家伝の創作が進められたことなどが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to examine documents related to the Shimazu House in order to understand the process behind the development of the Shimazu Household historical narrative (*yuisho*) from the Muromachi and Sengoku eras through the end of the early modern period. From the end of the sixteenth century and into the seventeenth century, the historical narrative of the Shimazu House underwent considerable revision and, in the course of this editing, incorporated elements from medieval literature and performance, including components from military tales. Moreover, this research project has demonstrated that, in the nineteenth century, the Satsuma domain ruler Shimazu Narioki and the people around him reconsidered their cultural inheritance, and, based on a new reception of medieval literature and performance, created updated historical narratives for the Shimazu House.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：島津家 武家家伝 軍記物語 兵法書 日本中世文学

1. 研究開始当初の背景

近年の軍記物語研究では、古態論や個別諸本論が続けられる一方で、享受・受容論が活発化しつつある。それは本質的に、近世・近

代を経て現代に至る期間を視野に収めて取り組まれるべき課題であるが、今のところ近世以降の享受・受容史に関する研究は進んでいるとはいいがたい状況にある。

また、中世・近世に生み出された武家家伝については、これまでも歴史学の分野から基礎研究が積み重ねられてきた。そして近年では、文学の分野からも、中世文学と武家家伝との関係性に注目し、その意義について指摘する研究もわずかではあるが現れてきた。特に軍記物語研究にかんしては、本研究代表者によって、こうした動向をも包括した形での受容論が模索され、従来の枠組みが再編されつつある。

本研究代表者がこれまでに取り組んできた研究課題は、中世に生まれた軍記物語が享受の過程で改作されたり、断片的な知識・言説として実社会で活用されたり、文学に限らぬさまざまな創作物の源となったりする実態を、多様な本文改訂の様相との響き合いにも目配りしながら、個々の事例が生じた時と場に即して分析し、その様相を通時的に把握していくことである。こうした研究構想のもとで、申請者は平成 16～17 年度および平成 18～20 年度の科学研究費補助金による研究において、室町期の刀剣伝書や武家家伝・故実・家訓といった資料群の発掘と調査・検討を進め、軍記物語受容史との関係からの成果を少しずつ公表してきた。

そうした調査の過程にあった平成 20 年に、研究代表者は薩摩島津家の家伝に関する特徴ある資料群と出会った。それは、近世幕末期の薩摩藩で実権を握った島津久光が、元藩主である父斉興から受け継いだ資料群で、中世以来の島津家の根本家伝に関わる貴重な資料群である。書物・文書・調度・道具類からなる当該資料群は、近世末の薩摩藩主斉興個人の日常の営みと心性を伝えている点で貴重であるのに加えて、島津家の歴史を背負った家督として藩政を執った斉興の歴史観や先祖観、ひいてはその精神基盤を形づくる島津家家伝の生成過程に、中世の軍記物語や兵法書が極めて大きな存在感を持っていたことを明確にものがたる内容をもつ点でも注目される。とりわけ、家祖島津忠久を頼朝の実子とみる近世島津家にとって、頼朝ら源氏の祖先たちの言動を記し留めた軍記物語や兵法書の叙述は、他家にとってのそれとは異なる、特別な意味をもっていたことが随所に窺える。そこで、近世末を生きた斉興の自己認識を把握することからはじめて、近世島津家の源氏としての系譜を幕府に公認させた藩主島津光久のときの実態へ、そして中世の島津家家伝の問題へと時代溯行的に軍記物語・兵法書受容の層を区分けしていくことによって、軍記物語受容史の新たな局面をひらくことをめざしたこの研究課題を着想するに至ったのであった。

2. 研究の目的

薩摩島津家の家伝の生成過程を、中世の軍

記物語や兵法書の受容という観点から分析し、室町期～近世末に至る諸段階を跡づけることを目的とする。近世末の島津斉興関係資料群の検討から始めて、近世初期、室町・戦国期へと時代を溯行する形で分析を進める。鎌倉期以来続く島津家という個性的な武家の自己認識や歴史意識が、軍記物語や兵法書との関係の中で変遷する実態を把握することで、前近代社会でこれらが担った役割に関する新知見を得るとともに、これまで手薄だった近世社会における受容の諸相を視野に収めた形で軍記物語受容史研究を再編することをめざす。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するための具体的方策として、下記のような課題を設けることとする。

(1) 関係資料の目録作成、デジタル化

鹿児島県歴史資料センター黎明館、尚古集成館、東京大学史料編纂所等が所蔵する島津斉興関係資料をはじめとする本研究にかかわる資料群のうち、主に書物・文書を対象にして、書誌情報を含んだ資料目録を作成する。黎明館・尚古集成館所蔵の島津斉興関係資料群については、資料全点をデジタルカメラで撮影してデジタル資料化し、今後の活用がしやすくなるようにする。

(2) 島津家家伝資料の翻刻・影印等による公開

島津斉興関係資料および鹿児島県立図書館蔵「玉里文庫資料」等のうち、島津家家伝の根本にかかわる資料を、将来的に翻刻・影印等の形で公開するべく、本文データを蓄積する。所蔵機関の許可がおりたものについては、随時公刊していく。

(3) 島津家家伝の生成段階に即した軍記物語・兵法書の受容相の解明

島津家における中世軍記物語や兵法書に関する独特な受容方法とそれに伴う家伝の生成過程を段階的に跡づける。全体をⅠ島津斉興期、Ⅱ島津光久期、Ⅲ室町・戦国期の3期にわけて、遡及的な観点から分析を進める。島津家家伝の特殊性を見定めるために、他家（平戸松浦家や毛利家などを予定）の関連事例との比較も行う。成果は論文・口頭発表等で公表する。

(4) 研究集会の開催——研究成果の社会還元

論文・学会発表による成果公開とは別に、資料所蔵機関と協力しながら各年度に一度鹿児島で研究集会を開催する。また、最終年度には東京でも研究集会を開催する。それらによって研究成果の地元地域への還元をはかり、かつ学界での情報共有を図る。

4. 研究成果

本研究によって、十六世紀末から十七世紀にかけて島津家由緒は大きく組みかえられていること、そうした由緒の再編の過程では軍記物語や幸若舞をはじめとする中世文芸が作用していること、十九世紀の薩摩藩主島津斉興とその周辺ではそれ以前の状況を踏まえ、中世文芸を幅広く、くり返し受容しうる環境が整っており、新たな家伝の創作が進められた様相などが明らかとなった。戦国期から近世末期の状況と向き合った一連の検討を通して、島津家にどのような文化環境が継承されてきたのかを具体的に把握できるようになったことは、本研究の最大の成果といえるだろう。それらの一部については、これまでも論文化した。

以後も本研究をとらえて得られた成果について、順次論文化していきたい。本研究は、日本のなかの一地域における文学的動向に光を当てたもので、一見すると単なる地域文化史のごとく受け止められる可能性もある。しかし、本研究は、こうした事例研究を通して全国的な様相への視座を得たり、従来は自明視されてきた都中心の文学史理解を問い直したりすることに、今後いっそう意義を求めべきであるという立場から試みられた。さらなる調査と情報整理を経て、それが実現していくことが期待される。

上記のような内容面の分析にもとづく成果に加えて、先述した「研究の方法」欄に示したその他の柱となる課題に即して、それぞれの成果についても簡潔に述べておくこととする。

まず資料調査について。鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵の島津斉興関係資料群の書誌調査と撮影をすべて終了することができた。尚古集成館所蔵分については、館の事情もあって当初の予定通りに進めることができず、すべての資料の調査と撮影を終えることができなかった。ただし、状況が許せば継続的に調査をすることは許されているので、今後も機会を求めて作業を継続し、作業完了まで仕上げることをめざしたい。

この他、ミュージアム知覧、鹿児島県立図書館、鹿児島大学付属図書館、東京大学史料編纂所等に赴き、撮影・コピー等の形で関連資料の収集を進めた。これらをもとに、斉興関係資料は順次内容を検討しつつ、関係資料目録公開に向けた準備を整えた。今後は所蔵機関との意思疎通をはかりつつ、作成中の資料目録の補訂と最終点検に取り組み、近い将来における公開をめざすことになる。これが実現することによって、資料の情報整理が進み、関連研究のいっそうの深化が期待できる。

次に資料翻刻について。これまで継続的に準備作業を続けてきたが、あくまでも資料所

蔵機関の許可が下りる範囲での公開となるため、現時点ではまだ具体化はしていない。これについても、公開へも道を探っていきたい。

最後に研究集会について。この三年間にわたって、鹿児島地域史研究会や隼人文化研究会といった、在鹿児島・在九州の研究者が中心メンバーとなっている、歴史ある研究会の協力を仰ぎつつ公開研究集会を開催した。質疑応答のなかで得られた知見も少なからずあり、今後も定期的な開催を続け、意見交換の拠点としていくことをめざしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 鈴木彰 「『門之浦伝来絵巻』小考——南薩における神事・祭祀との関わりから——」 「ミュージアム知覧紀要・館報」第13号 2013 (9)頁～(17)頁 査読なし
- ② 鈴木彰 「泗川の戦いにおける奇瑞の演出——島津氏を護る狐のこと——」 「国文学研究」第169集 2013 13頁～24頁 査読あり
- ③ 鈴木彰 「『征韓録』から『征韓武録』へ——読みかえられる泗川の戦いと狐出現の奇瑞——」 「アジア遊学」161 2013 239頁～255頁 査読なし
- ④ 鈴木彰 「再編される十六世紀の戦場体験——島津氏由緒との関係から——」 「文学」隔月刊第13巻第5号 2012 57頁～71頁 査読なし
- ⑤ 鈴木彰 「佚文」の生命力と再生する物語——薩摩・島津家の文化環境との関わりから—— 「中世文学」第57号 2012 14頁～24頁 査読あり
- ⑥ 鈴木彰 「平戸松浦家にとっての『剣巻』——松浦党安倍宗任末裔説をめぐる——」 「古典遺産」第61号 2012 1頁～20頁 査読なし

[学会発表] (計8件)

- ① 鈴木彰 「泗川の戦いにおける〈狐の奇瑞〉をめぐる——その創出と再解釈の行方——」 隼人文化研究会・斉興の会合同研究集会「島津斉興の歴史的心性——その位相と形成基盤を探る——」 2013. 3. 10 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- ② 鈴木彰 「薩摩藩における教訓歌受容史とその意義——島津忠良から島津斉興へ——」 隼人文化研究会・斉興の会合同研究集会「島津斉興の歴史的心性——その位相と形成基盤を探る——」 2013. 3. 10 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- ③ 鈴木彰 「島津斉興の歴史的心性——文政年

間を中心に——」 斉興の会東京集会「島津氏の家伝形成と軍記物語——島津斉興とその周辺——」 2013. 2. 3 東京工業大学 キャンパスイノベーションセンター

- ④鈴木彰「日新齋島津忠良という模範——語り継がれる戦国期の教訓歌——」上智大学 ソフィアシンポジウム「近世における武士像と武家文化の表象とその想像力」パネル 3 「懐旧と模範としての近世武士像」 2012. 12. 9 上智大学
- ⑤鈴木彰「島津氏源姓由緒考序説——泗川の戦いにおける「佳瑞」の創出をめぐる——」 軍記・語り物研究会 2012 年度大会 2012. 8. 29 梅光学院大学
- ⑥鈴木彰「島津斉興の自己認識と虎巻大法・教訓尊歌——歴史叙述としての『教訓千歌集』——」 隼人文化研究会・斉興の会合同研究集会 2012. 3. 11 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- ⑦鈴木彰「『佚文』の生命力と再生する物語——薩摩・島津家の文化環境との関わりから——」 中世文学会 2011. 6. 4 鶴見大学
- ⑧鈴木彰「島津家家伝「虎巻直看経」考——島津斉興をとりまく文化環境——」 鹿児島地域史研究会・斉興の会合同研究集会「近世島津家の文化環境と家伝形成」 2011. 3. 13 鹿児島県歴史資料センター黎明館

〔著書〕(計1件)

- ①鈴木彰、他、勉誠出版、東アジアの今昔物語集——翻訳・変成・予言、2012、368 頁～394 頁 執筆部分の題目「松浦静山と〈羅生門の鬼〉説話——『甲子夜話』にみる松浦家の過去と現在」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 彰 (SUZUKI AKIRA)
明治大学・政治経済学部・准教授
研究者番号：40287941

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：